琉球大学学術リポジトリ

女子学生が認知する母親像と父親像について　―母親と父親に対する性役割評価を中心に―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2008-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司, 前堂, 志乃, 富永, 大介, Michita, Yasushi, Maedo, Shino, Tominaga, Daisuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2957

女子学生が認知する母親像と父親像について

― 母親と父親に対する性役割評価を中心に ―

道田泰司・前堂志乃・富永大介

On the Images of Mother and Farther Recognized by Female Students .
- Aspect of Judging in Mother and Father's Sex-Role -

Yasushi Michita, Shino Maedo and Daisuke Tominaga

問　題

女性の社会進出がめざましい今日、女性の役割は、結婚し、子供を産み、育てるという伝統的な役割だけにとどまらなくなってきた。女性達は、生涯を通して職業を持ち続けること、あるいは趣味や興味を追求することで、自己を豊かにし、さらには社会にも貢献していけるような人生を望んでいる。そのため現代の女性は、職業人として、女性として、妻として、母親としての、多面的な役割を求められている。そして、それに応えていく中で、自己の同一性を確認し自己実現をはかっていかなければならない。ゆえに、女性が家庭を持ちながら仕事も続けることを希望し実行していくということは、従来の伝統的なライフスタイルには当てはまらない状況に直面し、数多くの問題を抱えることになるといえる。

これらの問題についての精力的な研究の一つとして女性の成人期における自我同一性に関して検討した岡本（1994）の研究がある。その研究のなかで、岡本は、女性の自我同一性が成熟していく過程には大きく分けて３つの時期が存在すると説明している。１つめは、青年後期から中年期にかけて社会人あるいは職業人として職業同一性が確立される時期。２つめは、中年期から中年後期にかけて、結婚、出産による女性性や母性性の必要性から確立される母親同一性と、既に確立されている職業同一性との間で葛藤が生じる時期。３つめは、中年後期に子供が巣立つことにより母性同一性の揺らぎ（空の巣症候群とも呼ばれる）が生じ、全ての役割を統合した全人間的な自我同一性の再確認が必要となる時期である。この区分を基に岡本の研究では、それぞれの時期におこる自我同一性の危機やそれによって生じる葛藤状態について検討されている。その結果に基づき、女性のライフスタイルには、各時期に対応した役割変化を通して社会や家族と関わりながら自己実現をはかり、女性としての自我同一性の確認を繰り返していくという側面があることが示唆されている。このように、現代女性が家庭や社会に期待されている新しい役割を果たしつつ新たなライフスタイルを確立していくためには、依然として様々な問題が残されており、今後も女性を取り巻く環境、女性に期待されている役割、女性自身が望む女性の役割などに関する様々な情報の集積が必要とされている。

ところで、女性の役割の中には、母親となって子供の役割獲得のモデルとなるという重要な側面がある。即ち、新たなライフスタイルを確立しようとする母親の姿は、これから女性が社会や家庭で果たしていく新しい役割についての認識を次の世代へと伝える媒介的な役割を担っているともいえる。この点から考えると、母親が職業や家事を通して生き生きと活動している姿が、女子学生の将来や職業に対する展望に影響を与えることは想像に難くない。実際に、生き生きとした母親像が、娘のライフスタイルやその中に含まれる役割についての意識に影響を及ぼすことが示唆されている（小花和、1992；浦上・小花和、1993、1994）。この結果からも、女子学生は、仕事を持つ成人としての母親をより身近なモデルとして認識していると考えられる。従って、今後の女性の役割やラ

イフスタイルを理解していく上で、娘である女子学生が、女性や母親の今現在の役割をどう評価しているのか、あるいは、女性や母親に対してどんな役割を期待しているのかについて検討していくことは重要な問題である。

では、一般的には女性あるいは母親の役割はどのように認識されているのだろうか。近年の性役割についての多くの研究において、一般に女性は、女性の役割として女性役割よりも男性役割の方をより重視していることが報告されている（平川、1992；伊藤、1978、1981、1986；伊藤・秋津、1983；柏木、1972、1974；白木・福富、1989）。特に、高校から大学あるいは専門学校へと進学し、職業人として生きていく希望が強い女子学生は、男性役割を重視し女性役割を低く評価していること、男性役割を重視する自己評価や自己の願望とは逆に、社会的には女性役割を多く求められることから、女性においては葛藤状態が生じやすいことが報告されている（平川,1992；伊藤、1978、1981、1986；伊藤・秋津、1983；白木・福富、1989）。また、伊藤（1978）は、女性や男性の性役割を示す特性語を用いて性役割を捉えるための尺度の作成を試み、従来の女性性、男性性には組み入れられない人間性（Humanity）役割を新たに加えた、MHFscaleを作成した。伊藤（1978）は、このMHFscaleを用いて20代と50代の男女（既婚者）において、個人的評価、社会的評価、異性への期待、自身への役割期待の４つの次元で性役割を評価させ比較している。その結果、特に女性は女性役割より以上に人間性（Humanity）役割を評価し、社会的にも望まれる性質であると考えていることが明らかにされた。その後、大学生の性役割の認知的側面について検討した白木・福富（1989）の研究でも、性役割特性語の中から伊藤（1978）が示したような人間性（Humanity）因子が抽出された。加えて、女子学生は、人間性（Humanity）を女性の中心的性役割であると捉えていることが示され、伊藤（1978）の先行研究を再確認する結果となっている。また、MHFscaleを用いて大学生の性役割の認知の在り方とそれに付随する葛藤の状態について検討した平川(1992)の研究では、男女学生ともに人間性(Humanity)の項目に対する評価が高いことが示された。加えて、女子学生においては、個人の願望と社会の期待の両次元では人間性（Humanity）役割が重視されているが、現状の自己評価が願望や社会の期待と一致しない場合が多く、葛藤状態に陥りやすいことが報告されている。これらの結果を踏まえて、これからの、女性あるいは男性の役割には、従来の女性性と男性性という２極的な分類だけではなく、両方の性に共通するような中性的あるいは人間的な役割を取り入れていく必要があることが示唆されている（平川,1992；伊藤、1978、1981、1986；伊藤・秋津、1983）。

以上、女性の性役割のついての先行研究の結果をまとめると、職業を持ちながら家庭も維持し続けようとする女性は、自己の願望としての性役割および社会に期待されている性役割の両方において、人間性（Humanity）役割を特に重視し、その役割を身につけていかなければならないと考えている。また、女性は、自己の願望として人間性（Humanity）や男性役割にウェイトを置き女性役割を低く評価しているのに対して、社会的には伝統的な女性役割も必要とされ続けているために、両者のギャップによる葛藤状態に陥りやすい。そのため、社会や家族形態などの環境が大きく変化し、女性でも男性と同等に職業人としての社会的役割が期待されている現代では、従来の２極分化（女性性－男性性）した性役割構造ではなく、生物学的性（sex）に規定されない、人間性（Humanity）役割の側面が必要とされてきている。

それでは、女性の生き方のモデルとされる母親の性役割を娘はどう認知しているのであろうか。母親に対する評価においても、先行研究によって示されたような、女性における人間性(Humanity)役割の重視が見られるであろうか。

現代の女子学生は母親の役割をどう評価しどのような役割を期待しているのだろうか。例えば、伝統的な女性や母親としての役割以外に評価され必要とされている役割があるのか。また、色々な役割の中で、母親において特に重視されている役割があるのか。さらに、父親の役割に対する評価と比較した場合では、女親であることによる特有な違いがみられるのか。女子学生の母親に対する認知的側面に関するこれらの問題点について調べ

ていくことで、母親を通して若い女性が学んでいく女性の役割あるいは生き方を知ることができると考えられる。さらに、これから社会へ出て活躍する女性の予備軍である女子学生が持つ母親の役割についての意識を明らかにしていくことは、これからの女性のライフスタイルとその中に含まれる役割を探る上で役立つ情報を得ることができると考えられる。

従って、現代の女性の新しいライフスタイルを探る試みの一つとして、娘の認識する母親の役割に関するデータを得るために、実際に女子学生が両親をどのように認知しているのかを調べる必要がある。そこで、女性の新しいライフスタイルとそれに含まれる様々な役割を明らかにしていくための基礎的な資料を得るための初期的な研究として、本研究では、女子学生の認知する母親像を父親像との比較を通して明らかにしていく。

目　的

本研究の目的は、女性の新しいライフスタイルとそこで求められる様々な役割を明らかにしていくために、伊藤（1978）の作成したMHF scaleの性役割特性語を用いて、女子学生の認知する母親像と父親像を調べることである。具体的には以下の点について検討する。①母親に対して女性性や母性性を示すような伝統的な役割を求めているか。②先行研究で明らかにされたような、自己の役割に関する人間性役割重視の傾向が母親に関する評価にも現れてくるのか。③父親に関する役割評価との比較においては母親に特有な違いがみられるだろうか。

方　法

調査対象者および手続き

沖縄県出身者と県外出身者の学生659人を調査対象者とした。このうちで男子学生のデータと、無回答の項目のあった121人とを除外し、女子学生のみ444人を分析対象とした。内訳は、沖縄県出身者226人(50.9%)、県外出身者218人(49.1%)、であった。

調査は、質問紙を用い、集合調査法によって、沖縄県内、県外ともに1993年の7月～8月の期間に実施した。

質問紙の構成

調査内容は、大きくわけて以下の3つの部分からなる。

1．伊藤（1978）の作成したMHFscale（30項目）を性役割尺度として用い、以下の2種類の設問により自分の父親と母親について評価させる質問項目。項目の内容は、Table 1に示した。

父親に対する評価：以下のそれぞれの項目について、あなたの父親にどの程度当てはまりますか。当てはまる程度に応じて、それぞれの箇所に○をつけて下さい（注：父親がいないときは解答しなくてもいい）

母親に対する評価：以下のそれぞれの項目について、あなたの母親にどの程度当てはまりますか。当てはまる程度に応じて、それぞれの箇所に○をつけて下さい（注：母親がいないときは解答しなくてもいい）

上記の2つの設問に基づいて、性役割を示す30個の項目それぞれに対して、「そうである（1点）」、「どちらかというとそうである（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「どちらかというとちがう（4点）」、「ちがう（5点）」の5段階で評定させた。

両親に対して評価が高い段階の反応に、低得点を与えるように得点化した。

2．対象者の意識

対象者が自身の将来や現在の家庭について持っている意識について、卒業後の就業の意志、父親あるいは母親と同様な生き方を望むか、父親あるいは母親からの影響の有無、父親あるいは母親に対する尊敬の程度、両親の地位の平等、結婚後の家事の分担、現在の家庭の幸せ、女性の修学の必要性、自己の性の受容、などの項目に関する設問（12項目）。

3．対象者の人口学的特性（Demographic Characteristics，DCと略す）

門限の有無、家族との同居の有無、兄弟姉妹の有無、長子であるか否か、性別、出身地、父親の職業、母親の職業、などに関する設問（8項目）。

結　果

因子分析

女子学生の認知する母親像と父親像を明らかにするために、母親と父親のデータそれぞれについて、本研究で使用した性役割尺度項目に関して、統計パッケージSAS（Statistical Analysis System）の中の主成分法、バリマックス法による直交回転を用い、因子分析を行なった。因子分析の結果、母親と父親の各因子を構成する項目が同じであったため、母親と父親のデータを込にした上で、再度同様な因子分析を行なった。固有値1以上、寄与率5％以上という基準で4因子を抽出した（Table 1を参照)。因子負荷量が.40以上で、他の因子との負荷量の絶対値の差が.10以上の項目を当該因子に属する項目と判断した。

Table 1　性役割項目に関する因子分析

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
・決断力のある	.80	.04	-.05	.03	.64
・自己主張できる	.74	-.08	.04	.19	.59
・行動力のある	.74	-.04	.09	.24	.61
・指導力を持った	.73	.17	-.01	.06	.57
・自分の生き方がある	.72	.11	.03	.02	.54
・意思の強い	.70	.15	-.01	-.07	.52
・信念をもった	.61	.34	.09	-.10	.51
・視野が広い	.57	.25	.18	-.04	.42
・大胆な	.53	-.16	.21	.40	.51
・頭の良い	.51	.22	.19	-.24	.40
・率直な	.51	.06	.06	.28	.35
・冒険心に富んだ	.50	-.05	.27	.33	.43
・たくましい	.46	.25	-.09	.24	.34
・暖かい	.11	.77	.15	.22	.67
・誠実な	.22	.75	.04	-.10	.62
・献身的な	.08	.69	.17	.14	.53
・心のひろい	.20	.66	.17	.06	.51
・従順な	-.10	.61	.25	.04	.44
・忍耐強い	.26	.56	.02	-1.3	.40
・色気のある	.05	.08	.77	.11	.61
・おしゃれな	.14	.07	.73	.20	.59
・優雅な	.17	.26	.71	.00	.60
・繊細な	-.00	.34	.54	-.27	.48
・明るい	.19	.29	.20	.73	.70
・静かな	.05	-.28	-.05	.71	.58
・あいきょうのある	.05	.45	.21	.64	.66
・頼りがいのある	.52	.54	.01	.12	.58
・かわいい	-.07	.45	.46	.32	.53
・言葉づかいが丁寧な	.07	.42	.45	-.22	.43
・健康な	.16	.13	-.14	.25	.12
寄与率（％）	26.0	12.4	7.7	5.5	
累積寄与率（％）	26.0	38.4	46.0	51.6	

因子Ⅰ：父性性　因子Ⅱ：母性性
因子Ⅲ：女性性　因子Ⅳ：人間性

第1因子は「決断力のある」、「自己主張できる」、「行動力のある」などの項目に因子負荷量が高かった。第1因子を構成する項目は、父親に対して求められる性役割と考えられることから、第1因子を「父性性」と命名した。

第2因子は「暖かい」、「誠実な」、「献身的な」などの項目に因子負荷量が高かった。第2因子を構成する項目は、母親に対して求められる性役割と考えられることから、第2因子を「母性性」と命名した。

第3因子は、「色気のある」、「おしゃれな」、「優雅な」などの項目に因子負荷量が高かった。第3因子を構成する項目は、女性らしさに関する性役割特性語と考えられることから、第3因子を「女性性」と命名した。

第4因子は、「明るい」、「静かな」、「あいきょうのある」などの項目に因子負荷量が高かった。第4因子を構成する項目は、母親・父親あるいは女性・男性のどちらにも共通する性役割と考えられることから、「人間性」と命名した。

母親と父親それぞれの性役割得点を比較するために、各因子の性役割得点と4因子の総得点は、母親と父親について別々に算出した。各因子の性役割得点は、その因子に属する項目得点の和を項目数で除し、4因子の総得点は4因子全部の項目得点の和を項目数で除して算出したものである。

ただし、本研究では、各項目に対する評価が高い反応であるほど低得点を与えるように得点化したため、性役割得点が低いほど両親に対する評価が高いと判断していることに注意していただきたい。

性役割の4因子間の関係と母親と父親による違い

上記に得られた性役割の4因子の間にどのような関係が存在するかを、母親と父親の各因子の性役割得点について、相関分析および分散分析（下位検定はすべてTukeyの法で行ない、有意水準は5％とした）によって検討した。その結果を、母親についてはTable 2に、父親についてはTable 3にそれぞれ示した。

母親について（Table 2を参照）

相関分析の結果からみると、母親の4因子の性役割得点においては、父性性と母性性、女性性、人間性の間に有意な高い正の相関関係がみられた。また母性性と、女性性および人間性の3因子

Table 2
母親の性役割の各因子の得点およびその相関

	M(SD)	1.	2.	3.
1．父性性	2.44(.71)			
2．母性性	2.11(.69)	.31***		
3．女性性	2.95(.74)	.32***	.32***	
4．人間性	1.86(.66)	.37***	.14**	.08

Notes *** p＜.001、** p＜.01、* p＜.05

Table 3
父親の性役割の各因子の得点およびその相関

	M(SD)	1.	2.	3.
1．父性性	2.40(.74)			
2．母性性	2.51(.83)	.41***		
3．女性性	3.76(.78)	.28***	.38***	
4．人間性	2.43(.92)	.29***	.15**	.03

Notes *** p＜.001、** p＜.01、* p＜.05

の性役割の間にも有意な正の相関関係がみられた。特に、母性性と女性性の間に高い正の相関関係が存在している。母親の性役割得点は、父性性が低得点であるほど、母性性、女性性、人間性の得点も低くなっており、言い換えると、父性性に対する評価が高いほど、母性性、女性性、人間性に対する評価も高くなった。また、母性性に対する評価が高いほど女性性に関する評価も高くなった。

性役割特性の4因子についての1要因の分散分析の結果、母親の4因子の性役割得点の間に有意差がみられ（$F(3,443)=272.9$、$p<.001$）、各因子は、女性性＞父性性＞母性性＞人間性の順で性役割得点が低かった。すなわち、母親においては、人間性に対する評価が最も高く、続いて母性性、父性性、の順で評価が下がり、女性性に対する評価が最も低かった。

父親について（Table 3 を参照）

相関分析の結果からみると、父親の4因子の性役割得点においては、父性性と母性性、女性性、人間性の間に有意な高い正の相関関係がみられた。また、母性性と女性性および人間性の3因子の性役割の間にも有意な正の相関関係がみられた。特に、母性性と女性性の間に高い正の相関関係が存在している。

父親の性役割得点においては、父性性に対する評価が高いほど、母性性、女性性、人間性に対する評価も高くなった。また、母性性に対する評価が高いほど女性性に関する評価も高くなった。

性役割の4因子についての1要因の分散分析の結果、父親の4因子の性役割得点の間に有意差がみられ（$F(3,443)=381.9$, $p<.001$）、女性性因子は、他の3つの因子よりも性役割得点が高かった。すなわち、父親においては、父性性、母性性、人間性に対する評価に差はなく、この3因子に比べ女性性に対する評価が低かった。

母親と父親の性役割得点の比較（Figure 1 を参照）

4因子の性役割得点と総因子得点それぞれについて、母親と父親の性役割得点の比較をする1要因の分散分析を行なった。。その結果、父性性においては母親と父親の性役割得点には差がなく、その他の3因子と総因子得点においては母親と父親の性役割得点に有意差がみられた。母性性（$F(1,443)=74.29$、$p<.001$）、女性性（$F(1,443)=385.27$、$p<.001$）、人間性（$F(1,443)=112.63$、$p<.001$）、総得点（$F(1,443)=82.07$, $p<.001$）のいずれにおいても父親よりも母親の性役割得点の方が低かった。性役割特性全体に関しては、父親よりも母親に対する評価の方が高かった。父性性因子においては両親に対する評価の間に違いはなく、母性性、女性性、人間性の3因子においては、父親よりも母親に対する評価の方が高かった。

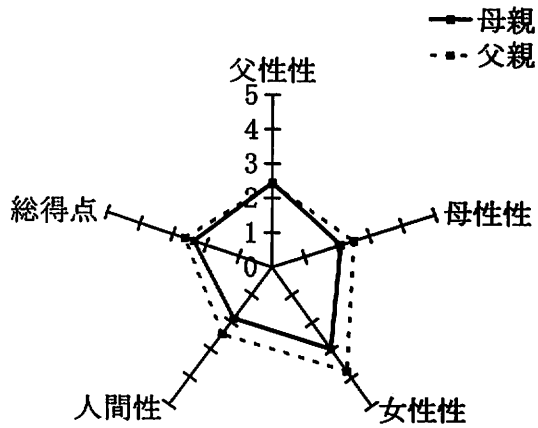

Figure 1　母親と父親の各因子の性役割得点と総得点　母親と父親の比較において、母性性得点、女性性得点、人間性得点、総合点の間に有意差（p＜.001）があった。

考　察

本研究は、女性の新しいライフスタイルとそこで求められる役割を明らかにするために役立つ情報を得るために、伊藤（1978）の作成したMHFscaleの性役割特性語を用いて、女子学生の認知する母親像と父親像を把握することを目的とした。

まず、女子学生の認知する母親像と父親像に対する性役割評価には、父性性、母性性、女性性、人間性の４因子が存在すること、両親それぞれの因子構造はほぼ等しいことが明かになった。

父性性は、決断力のある・自己主張できる等の項目から行動力を現し、母性性は、暖かい・誠実な等の項目から包容力を現し、女性性は、色気のある・おしゃれな等の項目から従来から言われている女性の性的魅力を現し、人間性は、明るい・静かな等の項目から性格的な活発さを現しているといえる。さらに、母親、父親別に、得られた４つの性役割因子間に関して、相関と差異を検討した結果から、母親と父親の間で、各性役割因子についての評価に異なる側面が存在することがわかった。

母親像について

母親の各性役割評価間には、父性性と母性性、女性性、人間性の間と、および、母性性と、女性性あるいは人間性の間に、高い正の相関がみられた。母親に対して父性役割の評価が高いほど、母性性、女性性、人間性の各役割に関する評価も高くなることがわかった。さらに、母性役割に関する評価が高いほど女性役割に関する評価も高くなることが分かった。

また、母親の各性役割に対する女子学生の評価には違いが認められ、人間性に対する評価が最も高く、続いて母性性、父性性、の順で評価が下がり、女性性に対する評価が最も低かった。

本研究で得られた、父性役割は、伊藤（1978）の抽出した男性役割と人間性（Humanity）役割を合わせたような項目で構成されている。そのため女子学生は、行動力を現す父性役割は、両親の性（sex）を越えた親役割の中核となるものと捉えていると推測される。従って、母親においても、父性役割の評価が高くなると、その他の役割の評価も高くなり、より好ましい母親像として認知されると考えられる。

また、各性役割評価の間の差異から、女子学生は自分の母親に関して、まず性格的に活発で、続いて包容力があり行動力もある母親像を持っているといえる。ここで特筆すべきことは、女子学生は母親の女性性を最も低く評価していることである。これは、伊藤（1978）やその他の先行研究（平川，1992；伊藤，1981，1986；伊藤・秋津，1983；柏木、1972、1974；白木・福富、1989）が示唆している、女性が示す女性役割の軽視の傾向を再確認した結果と考えられる。この結果の原因として２通りの解釈ができる。ひとつは、女性は自己の願望としても社会的期待においても女性性を低く評価し人間性や男性性を重視するという、女性の性役割評価の一般的な傾向が現われたという解釈。もうひとつは、女子学生にとっては、母親は女性である前に保護者である親として認知されており、親役割が強調され女性性は認知されにくくなるという解釈である。ところで、父親像と母親像の発達的変容を検討した境（1993）の研究では、中学、高校、大学と子どもの年齢があがるにつれ男女とも、母親を全体的に一人の人間として、親的、性的イメージを共に持つものとして認知できるようになると報告している。この報告に基づき女子学生が母親を全体的に認知していると仮定すれば、前者の解釈が採択される。しかし、今回の結果のみで、どちらか一方の解釈だけで十分なのか、両方が当てはまるのかの結論を下すのは早計であり、今後さらに詳しい検討が必要だと言える。

父親像について

父親について各性役割評価の間には、父性性と母性性、女性性、人間性の間と、母性性と女性性あるいは人間性の間に、高い正の相関がみられた。父親に対して父性役割に関する評価が高いほど、母性性、女性性、人間性の各役割に関する評価も高くなった。また、母性役割に対する評価が高いほど女性性役割に関する評価も高くなった。

また、父親に対する女子学生の各性役割評価間には違いがみられ、父性性、母性性、人間性の３つの性役割に対する評価に差はなく、この３つの役割に比べて女性役割に対する評価が低かった。

母親像のところでも述べたように、女子学生は、

行動力を現す父性役割は親役割の中核となるものと捉えており、かつ、父親においては、従来言われている男性性を現すものとしても認知されていると推測される。従って、父親においても父性役割の評価が高くなるとその他の役割の評価も高くなり、より好ましい父親像として認知されると考えられる。

また、各性役割評価の間の差異から、女子学生は自分の父親に関して、行動力、包容力、性格的な活発さが同程度備わっている父親像を持っているといえる。また、父親に関して女性性が全く評価されていないことは多くの先行研究（平川、1992；伊藤、1978、1981、1986；伊藤・秋津、1983；柏木、1972、1974；白木・福富、1989）で示唆されているとおり、男女に共通した男性における女性性の嫌悪という一般的傾向が、女子学生の父親像にも影響を及ぼしていると考えられる。

母親像と父親像の比較：母親像の特徴

まず、母親と父親それぞれにおける各性役割間の関係は、父性性役割に対する評価が高ければ、その他の３つの性役割に対する評価も高くなるという、同じパターンを示すことが明かになった。すなわち、両親どちらにおいても親役割の中核をなす父性役割が高く評価されるほど、母親像あるいは父親像はより好ましいと認知される。

また、母親と父親それぞれにおける各性役割間の差異については、異なったパターンが認められた。母親では、人間性に対する評価が最も高く、続いて母性性、父性性の順で評価が下がり、女性性に対する評価が最も低く、父親では、女性性役割に対する評価だけが低かった。このパターンを比較すると次のような違いが明かになった。母親像に関しては、性格的な活発さを現す人間性が最も重視され、続いて包容力、行動力を現す親役割が評価され、女性性は重要視されていない。これに対して、父親像に関しては、行動力、包容力、性格的な活発さは同じように評価され、女性性は評価されていない。この点から、母親像では各性役割間にそれぞれ差がみられるのに対して、父親像では、女性性以外の役割への女性性役割の軽視の２極に分かれていることが判明した。これは女子学生が、父親よりも母親の方をより身近なモデルとして捉えているために、母親像の評価においても細かな判断が行われたためと推測できる。ゆえに、中里（1991、1992、1994）やその他の先行研究（小花和、1992；浦上・小花和、1993、1994）が示唆する、女子学生が母親を身近なモデルとして認知し、自己を母親と同一視することで女性の役割を獲得しながら自己形成を行う成熟過程の影響が、現れていると考えられる。

さらに、各性役割評価について、母親と父親を直接比較したところ、まず、全体的には父親よりも母親に対する評価の方が高いことが明らかになった。これも、やはり女子学生が母親を同一視する成熟過程の影響により母親をより高く評価する傾向が現れていると考えられる。また、父性役割においては両親に対する評価の間に差はなく、母性性、女性性、人間性の３つの性役割においては、父親よりも母親に対する評価の方が高いことも明かになった。母性性、女性性、人間性において母親の方が高く評価されていることは、上述の母親同一視の影響と母性性や人間性に含まれる母性的特性が母親において強調されているためだと考えられる。これに対して、父性性役割が母親と父親の間で差がなかったのは、父性性役割が、男性性、父性性だけにとどまらない親的な役割を現す特性として、女子学生に認知されていることを示していると考えられる。ただし、女子学生は、母親においては父性性役割＝親役割として、父親では父性性役割＝親役割＋男性性として、認知している可能性が存在することに注意すべきであろう。

以上の考察から、女子学生の認知する母親像はつぎのようにまとめられる。現代の女子学生は、①自己の母親に対して、性格的に活発で包容力や行動力がある、という母親像を抱いている。②母親に関して母性性や人間性役割を評価し、包容力や性格的活発さを母親の魅力と認知しているが、女性役割が現す女性的魅力については評価していない。③母親に関して行動力を現す父性性、包容力を示す母性性を高く評価し、両特性をあわせて親的役割と認知している。

これらの母親像から、女子学生は、母親の役割を伝統的な母性、女性としてだけ受け止めているのではなく、活動的で力強い存在と認知しているといえる。しかし、本研究では、女性性に対する

評価が顕著に低いことが、母親を、親的にも性的にも統合された一人の人間として受け止めていないためなのか、一般的な女性の女性性否定の傾向が現れているためなのか明確にできなかった。従って今後は、母親を、母親として評価する次元以外に、女性としてあるいは職業人として評価する次元を加えた上で女子学生の母親像をさらに詳しく検討する必要があるといえる。

謝辞

1．本論文で用いた調査の実施に協力して頂いた、沖縄女子短期大学、沖縄キリスト教短期大学、沖縄看護学校の皆さんに深く感謝致します。
2．本論文で用いた調査の実施に協力して頂いた、広島女学院大学の桐木健始助教授と学生の皆さんに深く感謝致します。
3．論文の作成にあたり有益な示唆を下さった、広島大学大学院教育学研究科の周玉慧さんに深く感謝致します。

引用文献

1）平川貴之　1992　性役割葛藤と性の受容・自我同一性の関係ー認知的３側面の食い違いを葛藤の指標としてー　琉球大学教育学部初等教育学科心理学専修卒業論文（未刊行）
2）伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究、26、1、1-10.
3）伊藤裕子　1981　女子青年の性役割意識の構造　教育心理学研究、29，1，84-87.
4）伊藤裕子　1986　性役割特性語の意味構造ー性役割測定尺度（ISRS）作成の試みー教育心理学研究、34，2，168-174
5）伊藤裕子・秋津慶子　1983　青年期における性役割観および性役割期待の認知　教育心理学研究、31，2，146-151
6）柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究、20，48-58.
7）柏木恵子　1974　青年期における性役割の認知Ⅲ　教育心理学研究、22，205-215.
8）小花和尚子　1992　女子短大生における母親の認知ー主婦としての母親についてー日本心理学会第56回大会発表論文集，45
9）中里みどり　1991　女子学生の職業観：学生と両親の比較　日本心理学会第55回大会発表論文集，656.
10）中里みどり　1992　女子学生の性役割意識：学生と両親の比較　日本心理学会第56回大会発表論文集，175.
11）中里みどり　1994　女子学生の性役割意識(3)ー自己評価、ソーシャルサポートとの関係ー日本心理学会第58回大会発表論文集，119.
12）岡本裕子　1994　成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究　風間書房
13）境　千恵　1993　父親像、母親像の発達的変容　日本教育心理学会第35回総会発表論文集、25.
14）白木良和・福富護　1989　性役割の認知とSelf-esteem　東京学芸大学紀要　1部門40、55-65.
15）浦上昌則・小花和尚子　1993　女子大生における母親の認知(2)ー母親のストレスに着目してー日本心理学会第57回大会発表論文集、115.
16）浦上昌則・小花和尚子　1994　女子短大生における母親の認知(3)ーライフスタイル意識に着目してー　日本心理学会第58回大会発表論文集，350.